20231129　森林破壊を止める！シリーズ「地球沸騰化」（ＮＨＫ）より

前回は、地球環境が抱える問題を自分事ととらえ、本気に取り組む３．５％の連帯を作ろうという斎藤幸平さんの主張をご紹介しました。

現在、NHK クローズアップ現代では、シリーズ「地球沸騰化」とのタイトルで、気候変動による危機と各国の対策等を特集しています。(NHK プラスで、１２月５日まで無料で見られます）その内容から、今日は「森林破壊」の実態とその深刻な影響、国レベルの対策についてご報告します。１番組を要約（？）したので、相当な長さになってしまいました。

気候変動ストップのカギを握る森林が、今急速に失われています。
観測史上最も暑い夏となった今年、世界各地の森林が炎に包まれました。ギリシャは、ヨーロッパ史上最悪の森林火災に襲われました。火は１７日間にわたって拡大し、東京都の半分にあたる約 1,000 ㎢が被害を受けました。豊かな森は、そのものが大量の二酸化炭素を貯蔵していました。この火災で大量の二酸化炭素が環境に排出されてしまったのは確実です。ギリシャもこの夏は本当に暑く、40 度、45 度を超える猛暑の日が何日も続き、山も平野も乾ききってしまっていたのでした。

グランサム気候変動・環境研究所のボニー・ワーリング博士は警告します。「森林資源は、化石燃料によって排出される二酸化炭素の２割を吸収します。気候変動が影響し、この森林が年間 500 万ヘクタール消失しています。それは大気中の二酸化炭素を増加させ、気候変動を加速させます。気候変動は、さらに森林破壊を加速させ、さらにそれが気候変動を悪化さ

せるという負の連鎖が起きています。気候はゲームオーバーです。今すぐ森林を守る必要があります。」

また、先進国の経済活動が、熱帯林の喪失を加速させています。
インドネシアでは大規模な森林開発が行われ、そこにはパームヤシ農園が次々につくられています。パーム農園の周辺では至る所で森林火災が起きています。原因の一つは、農地を広げるための野焼きです。インドネシア政府は原則野焼きを禁止していますが、低コストで開墾できるため、野焼きは後を絶ちません。ここには、通常とは異なるリスクがあるといいます。それは泥炭地と呼ばれるインドネシアに広がる土壌の性質です。泥炭は古い枯れ葉や木片が分解されずに積もった軟らかい層です。通常の土壌の 20 倍もの炭素を貯蔵していると推計されています。泥炭層１ｍが 1000 年分の歴史をもつといわれていて、この土壌が１．５ｍ燃えれば、1000 年以上前の炭素が大気に放出されることになります。ひとたび燃えると大量の二酸化炭素を放出することになるので、「炭素爆弾」と呼ばれています。なお、泥炭地は地中でも燃え広がるという性質があり、地上に炎が見えていなくても地中で大きな火災が発生していることがあるのです。
森林を抱える地元の住民や NGO は、森林破壊の現状を先進国の人たちにこそ知って欲しいといいます。インドネシアの環境 NGO の方はテレビカメラに「先進国の消費者は製品の背景をきちんと知る必要があります。」と強く訴えていました。
森林はすでに持続可能でないところまで来てしまいました。私たちはこれまで、森林は再生可能であることを前提として開発を続けてきました。しかし、そのバランスは大きく崩れてしまっています。

先月フランスのパリで行われた世界的なチョコレートの見本市の会場では、チョコレートと森林破壊について真剣に話し合われていました。「森林を伐採してカカオを植え、低コストで生産する。それが森林破壊の元なんだ！」と。
こうした現状に野心的（大きなリスクや負担を伴うが、強い意志をもって決断するというニュアンスですね）な取組を始めたのがヨーロッパです。EU では、来年末から「森林破壊防止の規則」をスタートさせます。規則では、域内で生産販売、輸出される商品が、森林破壊に加担していないか確認することが企業に義務付けられます。この成立を後押ししたのは、市民や環境団体による運動でした。違反すると売り上げの４％以上の罰金が科せられる場合があります。世界初となる厳しい規制に企業は対応を迫られています。
木材パルプを原料としている大手イタリアの製紙メーカーの担当者は番組内でこう語っています。「消費者は美しさや価格だけでなく、製品の持続可能性という側面にも目を向けているのです。ヨーロッパの若い世代は特にです。」

地球温暖化を阻止するカギを握る地球上の森林資源が、危機に瀕しています。この状況に立ち向かうには、残念ながら日本はあまりに関心を持たなさすぎるように私は感じます。
「先進国の消費者は製品の背景をきちんと知る必要があります。」
というインドネシアの青年の言葉、
「消費者は美しさや価格だけでなく、製品の持続可能性という側面にも目を向けているのです。ヨーロッパの若い世代は特にです。」
というイタリア企業の方の話には胸をうたれました。

日本の消費者の意識はどうか、日本の若い世代の意識はどうか、
環境と未来と今できることを真剣に考え、連携を探り、行動できるところから始める学びをもっと積極的に進めるべきなのではないでしょうか。
「エシカルが当たり前」という国の風土をいかに育むか、
サッカースタジアムで、ゴミを拾うことを「当たり前」と感じ行動できる国民性はいかにして育まれたのか、小さいうちから繰り返し繰り返し「来る前よりも美しくだよ」と言い聞かされ続け、その教えを学校でも繰り返し教え続けたから、全国どこでも教え続けたから、ではないでしょうか。
同じだと思うのです。持続可能な社会の担い手を育む教育は、繰り返し繰り返し当たり前になるまで続け、そしてその当たり前をその次にも伝え続けていくことしかないと思います。五小の教育がその一石になれたらと願います。